児童・生徒の居住空間選択における優先条件と住生活改善意識

渡瀬　典子*・長澤　由喜子*

（2012年３月５日受理）

Noriko WATASE・Yukiko NAGASAWA

The Present Status of Students' Housing Priorities and their Awareness of Living Space Improvement

１．はじめに

第二次大戦から高度経済成長期を経て「住宅問題は“量”から“質”へと転換した」という言説に対し西山夘三は様々な検討をする中で，「住宅が発展していくプロセスの原動力」は「住んでいる人たち自身がもつ生活改善要求」であると捉えた。そして，西山は居住者が自らの住意識・住居観・住要求を正しく認識することが住まい方の質を高めるために重要であることを見出した[1)]。

家庭科教育では，小学校から高等学校に至るまで住生活に関わる事項が必修の学習内容として組まれ，各学校段階で児童･生徒の住意識･住居観･住要求の育成が企図されている。しかし，子どもたちの生活を支える住環境は，衣生活，食生活以上に個人差が大きく，教材開発や指導の難しさが指摘されることもある。現在からおよそ四半世紀前にあたる1985（昭和60）年に，日本家庭科教育学会東北支部会は子どもの生活実態，家庭生活に関わる知識や実践の状況を明らかにするため，東北6県の小・中・高校生に「家庭生活に関する認識調査」を実施した。住生活については「１．住生活に関する子どもの生活経験を子ども自身の基本的生活習慣の実態として捉えること，２．住まいに関わる問題の処理能力として，与えられた様々の条件を同時に考慮して適切な判断ができるかどうかを推し量ること，３．基本的生活習慣の実態として捉えられた生活経験と問題処理能力としての総合的判断力との関連を明らかにすること」が調査の意図とされた[2)]。以上のことを明らかにするために 同調査では「住まい方に関する基本的生活習慣の状況」，「間取り図による住生活空間の課題の読み取り（小・中学生は個人の部屋の家具配置，高校生は一軒家の間取り図）」が調査内容に設定された。間取り図は，先述の調査意図の２，３で述べられたように，複数の条件を勘案し，自らの住要求における優先事項をもとに「総合的判断」がなされ，好ましい間取りが選択される。調査では，間取りを選ぶだけでなく，理由を文章で説明させることで，児童・生徒の思考・判断の状況をうかがい知ることができる。とくにどの条件を最も重視したかを見ることで，児童・生徒の住意識・住居観・住要求の特徴が表れるといえよう。そこで，本研究は「85年調査」との比較をまじえ，現在の児童・生徒の住まい方に関する基本的生活習慣，住生活空間認識の現状について明らかにすることを目的とする。

２．調査方法・内容

（１）調査対象と方法

はじめに，対照調査である日本家庭科教育学会東北地区会による「家庭生活に関する認識調査」について言及する。当時，児童・生徒の技能の現

＊岩手大学教育学部

状を見るため，1985年２～３月に東北地方の各県で質問紙調査が実施された。調査対象は東北６県の小学生（小４:555人,小６:534人）と中学生（中２：570人）,高校生（高２：594人）の計　2,253人である。調査方法は,自記式集合調査法による。

この「家庭生活に関する認識調査」（以下、「85年調査」と記す）の方法にならい，2009年２月～３月に岩手県内の小学生，中学生，高校生を対象に質問紙調査を実施した（以下,「09年調査」と記す)。調査対象は,「85年調査」の岩手県内の調査対象校を中心に選定し，調査を依頼した。回答者の内訳は小学4年生104（男子51,女子53）人,小学６年生96（男子49,女子47）人，中学２年生152（男75,女77）人，高校２年生154（男85,女69）人，計　519人で，有効回答数は506（有効回答率97.5％）だった。調査方法は,「85年調査」と同じく質問紙による自記式集合調査法を用いた。

（２）調査内容

本研究では，質問紙調査の内容のうち,「住まい方に関する基本的生活習慣」と「間取り図による住生活空間の課題の読み取り(小中学生用),(高校生用)」について取り上げる。

３．学習指導要領に現れる住生活分野の学習内容

はじめに，間取り図の選択や読み取りの際に家庭科の学習内容の影響が考えられるため，調査実施時期（1985年及び2009年）の学習指導要領において住生活分野の学習内容がどのように設定されていたかについて言及する（2009年の小中学校については，施行前ではあったが，告示済みの新学習指導要領の内容を取り上げた)。表１に示すように,小学校では1985年調査時,住生活分野は「住居と家族」という領域にまとめられ，個人の生活だけではなく，家族を交えた生活環境調整が構想されていた。また，2008年告示の小学校学習指導要領では,「C快適な衣服と住まい」という括りになり，物理的な視点がより鮮明になったといえる。中学校では，2008年告示の学習指導要領において「家族の安全」という考え方が改めて明示されたが，1985年調査時に施行されていた1978年告示の中学校技術・家庭では，実際の生活場面を想定した間取り図（略平面図，断面図）の学習が内容に挙げられていた。高等学校では1985年の女子のみの履修形態から，1994年以降男女必修へと変わったが，住生活分野で扱われる学習内容も家庭生活における住まいだけではなく，地域社会の自然環境，社会環境等に対象が拡大した。また，多世代にわたる住まい方の変化を取り上げられるよ

表１　住生活分野の内容（学習指導要領）

	小学校	中学校	高等学校
1985 年 調査時	**[C　住居と家族:5 年生]** (1)自分の持ち物の整理・整とん、床、窓などの清掃、清掃用具の取扱およびごみの処理が適切にでき、気持のよい住まい方を工夫することができるようにする。 **[C　住居と家族:6年生]** (1)住居のはたらきを知り、寒さや暑さを防ぐ住まい方、換気の仕方、暖房用具の安全な扱い方及び採光や照明の仕方を理解させ、健康な住まい方を工夫することができるようにする。 (4)室内の美化や家族の生活に役立つ簡単なものを、布などを用いて製作し、生活を楽しくすることができるようにする。 男女必修　140 時間	**[H　住居]**以下の内容は適切な実習題材を中心として、相互に有機的な関連を図り総合的に展開できるよう指導する。 (1)住空間の計画 生徒の身近にある調理、食事、団らんなどの空間を取り上げ、略平面図や断面図で具体的に図示し、その住空間についての構想を立体的に検討する学習活動を行う。また、目的に応じて物を収納することについても考えさせる。 (2)室内の環境と整備 室内で行われる作業に適した採光、照明の仕方、温度、湿度、気流の調整の仕方、騒音防止の仕方について知らせる。さらに室内における給排水の設備器具の取扱いや家具、床、壁面などの手入れができるようにする。 (3)家庭生活における水と熱源の合理的な使い方 水と熱源の大切さを知らせ、資源を消費者の立場として有効に使用することを考えさせる。 必修(相互乗入)122.5 時間	**[家庭一般(4)住生活の設計・住居の管理]** ア　住居の機能と住生活の設計 (ア) 住居の機能:…住居本来の機能を物心両面から認識させるとともに、家庭生活の変化と住居について取り扱う。さらに、今後の住生活の方向を考えさせ、住宅問題を取り扱うようにする。 (イ) 住生活の設計:…住居の機能を十分発揮させるために、各室の機能、配置、広さなどが適切であることの必要性を認識させ、生活様式の改善や施設・設備の適切な配置が能率に関連することを理解させる。…設計については実習を通して、配置図、平面図が書けるようにする、 イ　住居の維持管理 (ア) 住居の衛生と安全:家族が衛生的な住生活を営むために、日照・採光・換気・防湿・しや音・冷暖房・照明・浄化槽などについて取り扱う。また、住居の安全に関しては、自然的災害、人為的災害に対する対策を取り上げ、衛生的で安全な住まい方ができるようにする。 (イ) 住居の管理計画 ウ　室内の整備と美化 (ア) 室内整備の計画と美化　:美的要素と機能的要素の面から、室内整備の計画の必要性を理解させ、各室の使用目的に応じた室内装飾と室内の美化を取り扱う。 (イ) 室内装飾　　女子のみ必修 140 時間

	小学校	中学校	高等学校
2009年調査時	[C 快適な衣服と住まい] (2)快適な住まい方 ア 住まい方に関心をもって、整理・整頓や清掃の仕方が分かり工夫できること イ 季節の変化に合わせた生活の大切さが分かり、快適な住まい方を工夫できる 男女必修 115時間	[C 衣生活・住生活と自立] (2)住居の機能と住まい方 ア 家族の住空間について考え、住居の基本的な機能について知ること。 イ 家族の安全を考えた室内環境の整え方を知り、快適な住まい方を工夫できること。 (3)衣生活、住生活などの生活の工夫 イ 衣生活、住生活などの課題と実践(選択) 男女必修 87.5時間	[家庭総合(4)生活の科学と文化 ウ住生活の科学と文化] (ア) 住居の機能:住居は人間の生活行為の器として必要諸条件を持つことを理解させる。また、気候・風土が異なる地域の住居、家族構成やライフステージ、生活にかかわる価値観が異なる場合の住居、さまざまな住様式などを取り上げ、住居の機能や人間と住居とのかかわりについて考えさせる。 (イ) 住空間の計画:家族の生活行為と住空間とのかかわり、生活行為や動作に必要な広さ、家具の配置と同線について理解させ、家族構成、ライフステージ、生活にかかわる価値観などに応じた住空間の計画について検討できるようにする。また、住居の平面図が読み取れるようにする。 (ウ) 住環境の整備:健康に配慮した衛生的な住居について、日照、採光、通風、換気、しゃ音、冷暖房、住居内で使用される化学物質による空気汚染などの室内環境を取り上げて理解させる。また、乳幼児や高齢者、障害者などの家庭内事故の防止、自然災害、火災などへの防災、防犯など、安全に配慮した室内環境の整備について理解させるとともに住居の計画的な維持管理の必要性について考えさせる。さらに、近隣との快適な住まい方のルールやプライバシーと地域社会との関連、自然環境や社会環境と住生活の関連などについても考えさせ、さまざまな生活条件をもった人々が安心して住めるよりよい住環境について関心を持たせる。 男女必修 140時間

【注】2009 年調査時の表には、小・中学校は当時発表済みではあったが、未施行の学習指導要領の記述を抜粋した。高等学校については、新しい学習指導要領が公表前だったため、当時施行されていた学習指導要領の内容を抜粋した。

【資料出所】文部省 1978.小学校指導書家庭編p.43,p.71,78　文部省 1978.中学校指導書技術・家庭編p.117-p.118、文部省 1979.高等学校学習指導要領解説p.26-27、文部科学省 2008.小学校学習指導要領解説家庭編.p.37-p.48、文部科学省 2008.中学校学習指導要領解説技術・家庭編.p.58-p.65、文部科学省 2000.高等学校学習指導要領解説家庭編.p.64-p.65

うになった。しかし，1985年の「家庭一般」の内容には「平面図の作成」が位置づけられていたが，2000年告示の学習指導要領「家庭総合」では平面図の作成はなく，「読み取り」だけである。なお，表１では選択必修科目のうち「家庭総合」を紹介したが，岩手県では６割以上の高等学校が「家庭総合」の半分の学習時間のみである２単位の「家庭基礎」を選択している。よって，いずれの学校段階においても（小学校２割減，中学校３割減）この四半世紀の間に家庭科の時間は減少し，住生活分野の学習時間の確保も課題となっている。

４．結果と考察

（1）住まい方に関する基本的生活習慣の状況

「机や本棚の整理整頓」「自分の部屋の掃除」「布団のあげおろし，またはベッドの整理」の実施頻度を５段階で質問した（よくする，ときどきする，たまにする，ほとんどしない，したことがない）。「85年調査」では，概ね“学年進行とともに”“男子よりも女子の方が”よく実施する（「よくする」「ときどきする」の合算）傾向にあったが，「09年調査」では，これらの傾向がはっきりと表れなくなり，実施頻度も落ちる傾向にある。「机や本棚の整理整頓」は「85年調査」で女子の約7割が「よくする」「ときどきする」と回答していたが，高２女子は４割にとどまった（図１－１）。同様に，「85年調査」では女子が学年進行に伴い「自分の

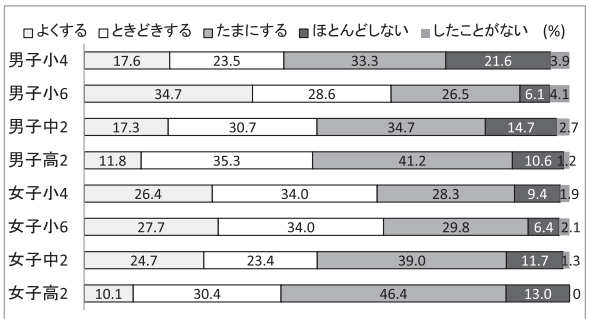

図１－１　机や本棚の整理整頓

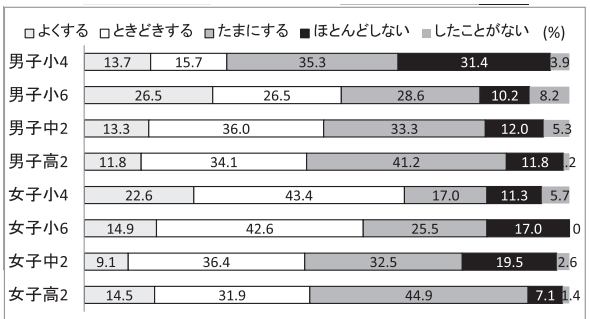

図１－２　自分の部屋の掃除

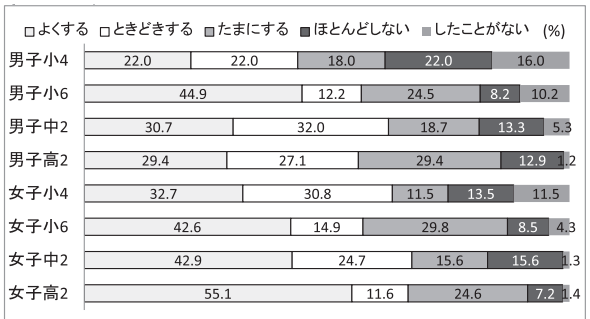

図１－３　布団のあげおろし、ベッドの整理

【問題文】下のような部屋を勉強部屋として自分１人で使えるとしたら，あなたは「つくえ，本だな，ベッド」をどのように配置しますか。窓は南向きで床からの高さを90ｃｍとします。

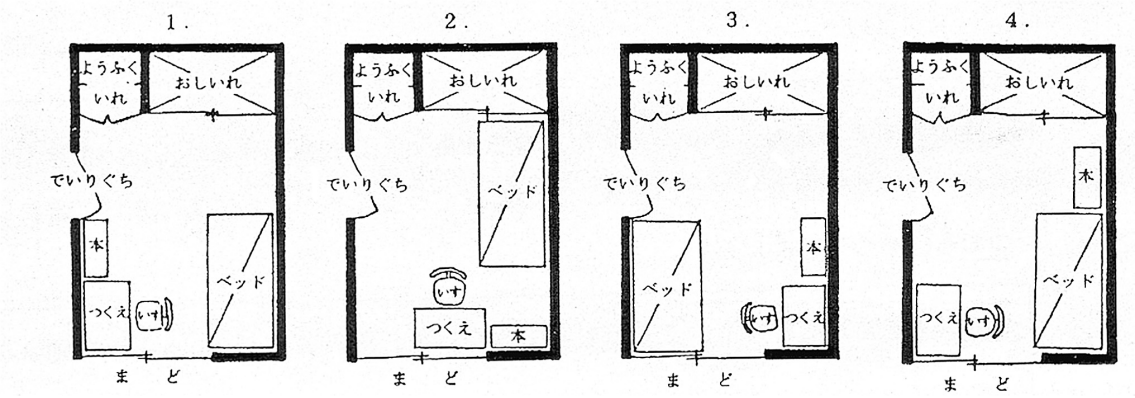

図２　質問紙に示した個人の部屋の家具配置（小・中学生用）

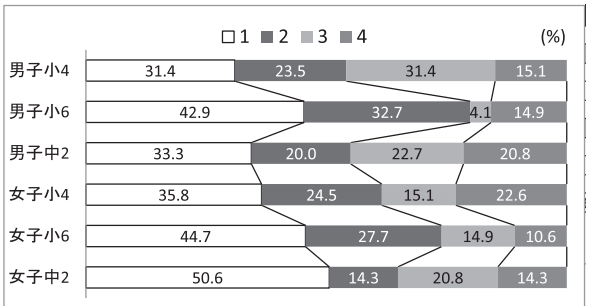

図３　小中学生が選択した個室のレイアウト

部屋の掃除」をする割合が顕著に高まるが，「09年調査」では学年の上昇の効果が認められない状況だった（図１－２）。しかし，図１－３に示すように，「布団のあげおろし，ベッドの整理」の項目のみ，男女それぞれ学年進行とともに実施する割合が高まる傾向が認められた（$p<0.01$）。

（２）家具配置の選択と住生活空間の評価―小中学生が個室に求める条件―

図２に示した４つの間取りの中から一つを選択し，選んだ理由を自由回答記述で得た。問題文にあるように，「自分１人で使える勉強部屋」に求める条件がこの設問から読み取ることができる。「85年調査」では採光，動線，スペースの活用等の理由から「１」が正解と見なされ，学年進行とともに「１」の選択率が上昇した。例えば，「１」の選択率が最も少なかった小４男子は30％程度だったが，小６で男女ともに「１」の選択率が増え，小６女子の半数以上が「１」を選んだ。中２では，さらに「１」の選択率が上がり，中２女子は6割近くが「１」を選択した。「09年調査」でも全体的に最も多く選択されたのが「１」であり，中２女子ではおよそ半数の支持を得た。

次に，選択率の順についてみると，「85年調査」では中２男子以外は全て「１・２・３・４」の順に選択されていた。唯一異なった選択パターン「１・２・３・４」の中２男子について同調査のまとめには「学習が夜に行われることが多くなるため，机に対する自然採光に注意が払われなくなるのではないか」と解釈された[3)]。それでは，「09年調査」ではどうだろうか。「85年調査」のように「１・２・３・４」順の選択パターンは小６女子のみで，「１・３・２・４」（小４男子），「１・４・２・３」（小６男子）「１・３・４・２」（中２男子），「１・２・４・３」（小４女子），「１・３・２と４同率」（中２女子）と選択パターンが全く異なるのが「09年調査」結果の特徴といえる。

そこで，子どもたちが何を選択の決め手にしたか理由について見ていく。表２の網掛け部分は各回答の当該学年で最も多く理由として挙げられていた内容である。万遍無く選択の根拠として挙げられていた内容は「日照・採光がよい」，「通風・換気のよさ」であり，必ず１人は選んだ理由に挙

表２　小中学生による個室のレイアウトを選んだ理由（複数回数）

		日照・採光				窓・通風			空間のゆとり			机に座った生活行為			休養時の生活行為			感覚的な回答			理由が示されない			
番号	理由 学年（回答数）	日照・採光がよい	ベッドに陽があたる	ベッド・机が窓に近い	日光があたりすぎない	通風・換気のよさ	窓から外の景色を楽しめる	窓を開け閉めしやすい	部屋に自由空間	出入り口にゆとり	押入れ・出し入れしやすい	机の横に本棚	机が入口に近い	ベッドが机に近い	ベッドの横に本棚がある	ベッドが壁際、部屋の奥	ベッドが入口に近い	落ち着く、暮らしやすそう	自分の部屋の配置に似ている	なんとなく	理由がよくわからない（説明不足）	わからない	無回答	その他
1	小4(35人)	8(22.9)				3(8.6)	2(5.7)		2(5.7)	1(2.9)	3(8.6)	18(51.4)	7(20.0)	3(8.6)		7(20.0)		2(5.7)	2(5.7)					4(11.4)
	小6(46人)	8(17.4)		4(8.7)		3(6.5)	3(6.5)	3(6.5)			4(8.7)	20(43.5)	2(4.3)	1(2.2)		2(4.3)			3(6.5)	5(10.9)	1(2.2)	1(2.2)	2(4.3)	3(6.5)
	中2(64人)	14(21.9)		5(7.8)		1(1.6)	1(1.6)	3(4.7)	8(12.5)		3(4.7)	15(23.4)	2(3.1)	1(1.6)		10(15.6)		9(14.1)	6(9.4)	2(3.1)	1(1.6)		1(1.6)	11(17.2)
2	小4(25人)	11(44.0)		1(4.0)		1(4.0)	7(28.0)		1(4.0)			6(24.0)					1(4.0)	4(16.0)	2(8.0)	1(4.0)				3(12.0)
	小6(29人)	8(27.6)	1(3.4)	4(13.8)		4(13.8)	1(3.4)	2(6.9)		3(10.3)	1(3.4)	4(13.8)						2(6.9)	3(10.3)	1(3.4)				3(10.3)
	中2(26人)	15(57.7)				3(11.5)	1(3.8)			2(7.7)		4(15.4)						1(3.8)	3(11.5)				1(3.8)	4(15.4)
3	小4(24人)	3(12.5)	2(8.3)		4(16.7)	1(4.2)	1(4.2)		1(4.2)		1(4.2)	9(37.5)					6(25.0)		1(4.2)					4(16.7)
	小6(10人)	1(10.0)	1(10.0)			1(10.0)					1(10.0)	3(30.0)		1(10.0)			1(10.0)	1(10.0)		1(10.0)		1(10.0)		2(20.0)
	中2(34人)	3(8.8)	5(14.7)	1(2.9)	3(8.8)	5(14.7)	1(2.9)		2(5.9)		1(2.9)	5(14.7)		2(5.9)			4(11.8)	4(11.8)	2(5.9)	2(5.9)				6(17.6)
4	小4(17人)	1(5.9)	1(5.9)		2(11.8)	2(11.8)	1(5.9)	1(5.9)					1(5.9)	2(11.8)	8(47.1)	6(35.3)		1(5.9)						5(29.4)
	小6(15人)	1(6.7)				3(20.0)	1(6.7)								5(33.3)	1(6.7)		2(13.3)	2(13.3)	1(6.7)				4(26.7)
	中2(29人)	2(6.9)		3(10.3)		1(3.4)	1(3.4)	2(6.9)		1(3.4)					12(41.4)	7(24.1)		1(3.4)	2(6.9)	2(6.9)			3(10.3)	5(17.2)

注：網掛けの箇所は、各回答の当該学年において最も多く挙げられていた理由

げていた。中２では，自然光が入る方向と利き手の関係（手元が陰になりにくい採光の仕方）について，説明する回答が見られた。「１」の選択者が選んだ理由として最も多く挙げたのは「机の横に本棚」があることだった。また，「誰が来たかわかる，出入り口から中の様子が見えにくい」等，他者の目を気にする回答が中２で複数見られた。「２」は「日照・採光がよい」の理由が多かったが，「３」では，机周りに窓がなく，自然光を取り入れにくいが，「日光があたりすぎない」ことが評価された。この「３」の配置は小４男子，中２男子・女子で２番目に支持された選択肢でもある。一方，「日照・採光がよい」ことを支持した回答には「エコだから」という理由が複数挙げられた。

「２」，「３」を選択した子どもは「机の横に本棚」があることを多く理由に挙げていたが，「４」では「ベッドの横に本棚」が最も多く理由に挙げられた。これらの理由に現れるように，回答者は部屋の中での過ごし方において，「机の上で勉強すること」あるいは「ベッドの上でくつろぐこと」それぞれどちらかを主に想定した場合，家具の配置の選び方が全く異なったと推察される。また，本棚にある本の種類が「百科事典」等，学習に関わるものを挙げた回答では「机の横に本棚」の配置を選んでいたが，「寝る前に本を読みたいから」という回答では「ベッドの横に本棚」があると便利であると述べており，この場合，本棚にあるのは趣味の本をイメージしていると考えられる。問題文では「勉強部屋」という状況設定がなされていたが，「09年調査」では，自分の個室は「勉強するための部屋」だけではなく，リラックスできることをより重視して家具の配置を考慮したことが推察される。それは「落ち着く」「暮らしやすそう」等の感覚的な印象による理由などにも表れている。そのほか，「自分の部屋の配置に似ている」という選択理由が各選択肢に共通して現れ，現在の暮らしを肯定する傾向が見て取れた。

（３）間取り図による住生活空間の課題の読み取り：高校生

次に，高校生による間取り図の読み取りから，彼らの住生活改善の課題意識を見ていく。1985年調査当時の高等学校家庭科の内容は平面図の学習が重視されていた。「85年調査」の報告書にも「平面計画は住居の機能性を考える場合もっとも主要な要素であり，間取り図のみかた，よみかたは住み手の住生活の姿勢が問われるもの」と捉えられていた[4)]。高校生対象の調査内容は，図４に示すように「ある４人家族（父・母・子ども２人→中学生女子と小学生男子）の住まい」の「最も問題だと思う事柄」を選択肢から２つ選ぶ構成になっている。「85年調査」では男女の回答傾向に大きな違いはなく，「居間の日当たりが悪い（51.4％）」，「DK を通らなければ居間に行けない（31.4％）」，「勝手口がない（26.5％）」，「DK・居間を通らなければ寝室に行けない（25.0％）」の順で回答率が高い。反対に回答率が低かったのは「子ども室が狭い（2.1％）」，「客間に縁側がない（3.6％）」，「子ども室の風通しが悪い（7.4％）」だった。続いて「09年調査」の結果を見ると，女子は「居間の日当たりが悪い（23.2％）」，「DK・居間を通ら

【問題文】下に示される間取りは　ある４人家族（父・母・子ども２人→中学生女子と小学生男子）の住まいです。この住まいにおいて最も問題だと思う事柄を下記の中から２つ選んでください。

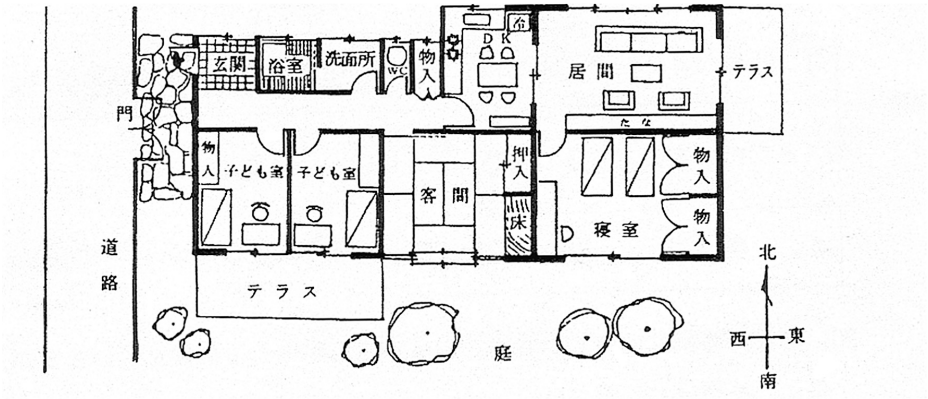

図４　質問紙に示した間取り（高校生用）

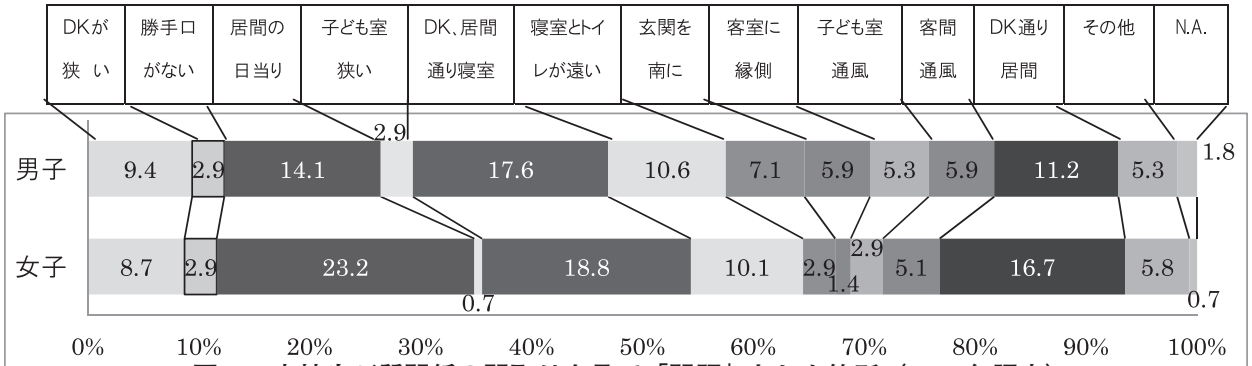

図５　高校生が質問紙の間取りを見て「問題」とした箇所（2009年調査）

なければ寝室に行けない（18.8%）」,「DKを通らなければ居間に行けない（16.7%）」,男子は「DK・居間を通らなければ寝室に行けない（17.6%）」,「居間の日当たりが悪い（14.1%）」,「DKを通らなければ居間に行けない（11.2%）」の順だった。「85年調査」では回答率が高かった「勝手口がない」は,「09年調査」では男女ともに2.9%で回答率が低い選択肢に変化した。これは，現代の高校生にとって「勝手口」があるライフスタイルが一般的ではなかったり，住生活の機能として不可欠だと認識されていなかったりすることが考えられる。また，女子で回答率が低かったのは「子ども室が狭い（0.7%）」,「客間に縁側がない（1.4%）」,男子では「子ども室が狭い（2.9%）」,「勝手口がない(2.9%)」だった。「その他」の回答として,「子ども室が玄関に近く,居間を通らなくても行ける」が最も多く（９名），“子どもが家族とコミュニケーションを図りにくい間取り”という課題の読み取りがされていた。他には「２階がない」という回答もあった。

５．まとめと今後の課題

「85年調査」では,「机や本棚の整理整頓」,「自分の部屋の掃除」がほぼ学年進行に伴って実施頻度が高まったが,「09年調査」では「布団のあげおろし，ベッドの整理」の項目を除いて，中高生の実施頻度はやや低下傾向にある。また,「85年調査」結果では，男女間で実施率に大きな差があり，女子の実施率が高かったが,「09年調査」では性差がやや縮小した。

小・中学生を対象に調査した「個人の勉強部屋の家具配置」では「適正な採光」,「押し入れや本

棚の使い勝手」,「動きやすさ」を考慮したレイアウトが学年進行とともに多く選択されていたが（85年調査),「09年調査」では学年による差が「85年調査」ほどには，はっきりと表れなくなり，選択の多様化が認められた。この結果には，回答者が「勉強部屋」に求める条件や優先事項が変化し，「効率的かつ能率的に学習できる空間づくり」よりもリラックスできる空間づくりへの選好が働いたと捉えられる。この結果は本研究と同じ学年を対象にした九州地区の調査で，児童・生徒が最優先する部屋での過ごし方が，男女ともに「心身のリラックス」をすること[5]という結果とも共通する。

また，高校生を対象にした「４人家族が居住する間取りの評価（問題点の抽出)」では，「居間の日照」に注目する点で「85年調査」と回答傾向が大きく変化しなかったが，「勝手口がない」ことが“問題”だと捉える回答が「09年調査」では著しく減少し，住まい方におけるライフスタイルの変化が如実に現れたといえよう。

「85年調査」の報告書の冒頭に「日本の社会の変化の中で家庭生活の変化はとくに著しいものの一つ」であり，「家庭が物心両面にわたり家族にとってよい『住まう場』となり，これからの環境に適応していくためには新しい生活技術が求められる」という認識が示されている[6]。「85年調査」から四半世紀が経過し，ライフスタイルや生活価値観の変化が様々な場面で見られる一方で，「持続可能性」等，個人の生活レベルだけでなく，グローバルな観点を含んだ住環境教育がますます必要とされている。妹尾によれば「住環境教育とは，住まいと居住地域を中心として，人間生活を取り巻く自然，建築物，人間と，それに関わる様々な文化的・社会的・自然的環境の相互関係を含めた認識を深め，問題・課題を自ら発見し，その解決と創造に主体的に関わる能力と行動につながる姿勢（態度・意欲）を養う教育」すなわち「住環境に対する主体性の形成を図る教育」と捉えられている[7]。また，アメリカの中等教育家庭科の教科書における住生活分野は「住宅と装飾（Homes and Decorating)，交通機関（Transportation)，家のケアとパーソナルソサエティ（Home Care and Personal Society)，環境保全（Protect the Environment)」の４項目から成り，例えば「家のケアとパーソナルソサエティ」の学習目標のひとつに，「安全性の保持：緊急時に準備可能な一般的処置を挙げられる。自分のコミュニティを安全に保つ方法を認識できる。路上にいる際，安全性を確保する方法を話し合うことができる。」ことが掲げられている[8]。このように，自分の住まいのほか，居住地域ともかかわって安全に住まうための学習が今後ますます求められるといえる。「09年調査」の小中学生を対象にした家具配置を選ぶ設問でも，「地震があった時に本棚が机やベッドより出入り口に近いと倒れて道がふさがれたりする（ので出入り口の近くに本棚がある配置は選ばなかった)」という災害への備えに関わる回答がいくつかあった。今後改めて，子どもたちの住まい方に関する意識と安全性の確保と関連する生活実践の状況について検証したい。最後に，本調査の実施にご協力くださいました各学校の先生方ならびに児童・生徒の皆様にこの場を借りてお礼を申し上げます。

［引用文献］

１）住宅研究会編 . すまい　西山夘三・住宅セミナー . 学芸出版社，1981，p.160
２）長澤由喜子. “住生活の技術” . 日本家庭科教育学会東北地区会編 . これからの家庭生活技術 ―子どもの実態と家庭科をめぐって―. 大盛堂出版所，1985，p.85
３）前掲書２)，p.90
４）金子幸子 . “高校生は間取り図をどう見るか” . 日本家庭科教育学会東北地区会編 . これからの家庭生活技術　―子どもの実態と家庭科をめぐって―. 大盛堂出版所 , 1985，p.91-95
５）中西雪夫他 . 児童・生徒の家庭生活における意思決定の背景（第３報）―住まうことについての意識の分析―. 日本家庭科教育学会誌，Vol.49,No.2，2006，p.113-121

6）壁谷沢万里子 .“本研究のねらい”. 日本家庭科教育学会東北地区会編 . これからの家庭生活技術　―子どもの実態と家庭科をめぐって―. 大盛堂出版所 , 1985, p. 7
7）妹尾理子 . 住環境リテラシーを育む . 萌文社, 2006, p.19
8）Clark,P.,Couch,S. & Felstehausen,G. Managing Life Skills,Glencoe, 2011,p.694−p.770